慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『万葉集』における「出づ」を含む複合動詞について：構成要素間の語彙的意味関係の分析を中心に
Sub Title	
Author	山口, 真紀(Yamaguchi, Maki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.45 (2007. 9) ,p.1- 27
JaLC DOI	10.14991/002.20070900-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20070900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『万葉集』における「出づ」を含む複合動詞について

――構成要素間の語彙的意味関係の分析を中心に――

山口　真紀

一、はじめに

古典語の複合動詞研究においては、修飾関係や補助関係といった構成要素間の文法的意味関係の分析[1]を行うことが中心になされてきた。これは、扱おうとする動詞連続の表現が「複合動詞」というに足るものであるかを判断するために前項、後項の緊密度を図る、という意味で有効な分類であった。しかし、何をもって「複合」しているとみなすかは共時的感覚によるところが大きく[2]、古典語について共時的感覚を持たない者の目からはその認定は容易ではない。今回扱う『万葉集』には前項、後項の意味が単純にプラスされたと思われる表現が多数存在している。これらは動作の継起面に沿って動詞が並べて書かれたものである可能性が高く、前項後項の結合による新たな意味の形成も見られない、いわゆる並列関係とされた。加えて集中には前項と後項が入れ替わって現れる例（「結合順の自由[3]」）も存在することからこれらは「複合」ではなく「連語」であるとされて、「複合動詞研究」の枠の中で焦点をあてられることが少なかった。しかし、時間の流れの中で「複合動詞」というものを考え、その萌芽を見るという視点を持てば連語的な動詞連続の表現であっても、観察に値すると思われる。

近年現代語研究の分野で複合動詞研究は盛んに行われている。古典語の分析が構成要素間の文法的意味関係の解明が中心であったのに対し、構成要素間の語彙的意味関係の分析を行うことが中心である。「外国語としての日本語教育」の要請が背景にあることもあり、前項と後項の語彙的な結合の規則とそれに関わる意味関係の解明に焦点があてられている。

複合動詞は、語彙でありながらその中に文法形式を持つ。故に、どちらの側面からの分析もともに複合動詞の一面を明らかにしているといえる。複合動詞については古典語と現代語がそれぞれ独自に研究の積み重ねを持ち、そのアプローチからも一見両者の間には大きな隔たりがあるように見える。しかし、長い歴史の上に今の言葉があるのであり、現代語、古典語という区切りは流れのどこに視点を置くかの違いである。もともと一つの流れであるならば双方の蓄積を互いに応用することは当然可能であり、そうすることによって複合動詞についての新たな一面がさらにまた明らかになるのではないだろうか。

筆者はこのような立場に立ち、修士論文[4]において集中の「行く」「来」「過ぐ」「渡る」を含む複合動詞表現について、現代語の手法を応用し、文法的意味関係の分析からさらに一歩踏み込んだ語彙的側面からの分析を行った。その結果、語の結合や入れ替わりには一定の法則があることがわかった。本稿では、前項における語の個別研究の続きとして、「出づ」を含む複合動詞を取り上げる。

二、先行研究

古典語と現代語について、異なった立場から分析が進められてきているため、それぞれに分けて示すことにする。

古典語

古典語の「出づ」を含む複合動詞について取り立てて研究したものに、関一雄氏の『国語複合動詞の研究』（一九七七年笠間書院）がある。氏は第二章第一節「複合動詞変遷上の一問題「他動詞―出づ」から「他動詞―出だす」へ」において、「～出づ」という形式が「～出だす」という形式に変化する過程について言及している。『源氏物語』等の中古の作品では「引き出づ」「思ひ出づ」という形で現れていたものが、時代が下るに従い、「引き出だす」「思い出だす」という形に変化していく点に着目し、その様相を分析している。その背景には上位成分（前項）に重きを置く傾向から下位成分（後項）に重きを置く傾向へ時代と共に移るという複合動詞全般の変化の流れがあり、「他動詞―出づ」形から「他動詞―出だす」形への変化もこれの反映であると述べている。

また、中村幸弘氏は『補助用言に関する研究』（一九九五年右文書院）において、「いづ」の項に次の二例を挙げ、その作用を説明している。

○―いづ―独立動詞「出づ」―

・御衣を取り出でて着せむとす。（竹取物語・九）

・いにしへのことなど、思い出できこえけり。（伊勢物語・八三）

「いづ」は、上接する動詞の動作・作用を外に向けて行う意を添えている働きをしている。

ここであげられた語はともに現代語に置き換えるとするならば、「取り出す」「思い出す」となるものである。それぞれの変化の様相には違いがあるとしても、時を経て「～出す」形に統合されていくという変遷をたどるという点では、同じ流れの中にある。しかし、古く「思ひ出づ」で表されていた意味が、そのまま現代語の「思い出す」に全く重なり合うかというと簡単にそうとも言いきれない。関氏の前掲書には中世以降の文学作品において「思ひ出づ」と「思ひ出だす」という形がともに使われていることが指摘されている（第三章第三節　複合動詞「おもひいづ」と「おもひいだす」をめぐって）。「文語的表現の意図的な使用」という点から両語の使い分けが分析されているが、両語の意味的な差異についてはここでは明らかにされていない。全く同じ意味であったかもしれないが、意味の差が存在していたかも知れず、その点については現段階でははっきりしない。どちらにせよ、現代語ではともに「思い出す」となり、私たちがこれらの語の意味を捉える際に、現代語の感覚に

頼る形で「思い出づ＝思い出す」のように、現代語の「思い出す」に重ねて理解を行っていると言える。そもそも現代語の感覚を全て排除して古典語を解釈することは不可能であり、むしろそこに現代語と古典語のつながりがあるとも考えられるのだが、現代語と古典語の間に存するこのような微妙な差を解明することは非常に難しい。

本稿では集中の歌に現れた「出づ」を含む複合動詞表現を見ていくが、意味を考える際、現代語訳を参照することを行う。例えば、「漕ぎ出（づ）」は「漕ぎ出す」とあてられることが多い。その意味は現代語の「漕ぎ出す」であるとしてしまえばそれまでなのだが、現代語の「漕ぎ出す」で表される内容は一様でない。現代語と古典語のつながりを意識しながら、このような点をより丁寧に見ていきたい。

古典語において「～出づ」と「～出だす」の違いが広く知られているものに、「見出づ・見出だす」、「聞き出づ・聞き出だす」[5]の例がある。関氏の前掲書や辞典類にも指摘のあるように、「出だす」を含む後者はより内から外へという概念が強調され「家・部屋の内から外に向かって物を言う」という意味を示し、「言い出づ」という表現が「口に出して言う」ほどの意味であるのに対して、使用される状況に違いがあり、別語として認識されていたことが明らかになっている。このように、文脈、用法上の違い等からある程度はっきりと当時の語の意味がわかっているものは別として、古典語における多くの「出づ」を含む複合動詞は、現代語で「～出す」となっているものは、そのままそれに頭の中で置き換えが行われているように思われる。[6]

自動詞「出づ」と他動詞「出す」のその発生の時点でのかかわりは複雑で、上代において「出づ」が他動詞として解すべきとされる例も存在する。

・あをによし　奈良を来離れ…朝霧の乱るる心　言に出でて言[7]わばゆゆしみ…（⑰四〇〇八）

・言ふことの　恐き国そ　紅の　色にな出でそ　思ひ死ぬとも（④六八三）

「口に出して」と一般的に他動詞とされるものである。また、複合動詞には、次のような、よみの段階で「出」を「出づ」とするか「出す」とするか分かれている例もある。

・大君の　命恐み　見れど飽かぬ…いや高に　山も越え来ぬ　剣大刀　鞘ゆ抜き出でて　伊香山　いかにか我がせむ　行くへ知らずて（⑬三二四〇）

これを『日本古典文学大系』は「いだす」とよみ、『新編日本古典文学全集』は「いづ」とよむ。ただし、後者も訳語は「抜き出す」とあてている。上代の他動詞の「出づ」について、関氏は「このような「出づ」が他動詞であるともみなされるのは、上の動詞にひかれて下の本来の自動詞「出づ」がかりに他動詞の性を帯びたが故であると限定して考えたいと思う」と述べ、その理由に前出の巻四の六三八番歌をあげ、「出づ」が全く自由に他動詞として用いられることはなく、「言に出づ」「色に出づ」といった成句の中で、他動詞的に用いられているに過ぎないからであるとしている。氏によれば「出だす」の最も古い確かな例は上代後半以降の次の歌である。

・大船を　荒海に出だし　います君　つつむことなく　はや帰りませ（⑮三五八二）

そして、複合動詞の成立の様相としては、より早く成立した「出づ」が他動詞に下接して他動詞性を帯びた用法が一般化し、中古以降に頻出する「他動詞―出づ」形式の複合動詞の基盤になったとしている。百留康晴氏は関氏の論をうけ、「複合動詞と動詞連接―「～出づ」を中心に」（『国語と国文学』80二〇〇三年東京大学）において、「出づ」に上接する動詞の自他という観点からさらに細かく「～出づ」の歴史的変遷を追い、「動詞連接」と「複合動詞」の違いについて述べている。

現代語

現代語を対象としたものに姫野昌子氏の研究がある。『複合動詞の構造と意味用法』「第5章「～でる」と「～だす」（一九九九年　ひつじ書房）」において、「～でる」と「～だす」を含む複合動詞を比較させる形でその意味特徴を分析している。現代語の複合動詞研究は、先に触れたように外国語としての日本語教育の立場から焦点をあてたものが多い。氏の詳細な分析もそれを基盤としている。「～でる」については、前項動詞をその意味特徴によって「「外部への移動」の意を含むもの」と「「外部への移動」の意を含まぬもの」、「接頭語等」の三つに大別し、更に、後項動詞「～でる」が同一の文脈で「～だす」に言い換えられるかどうかを基準に後項要素を二つにわける。[8]そして前項動詞に外部への移動の意が含まれている場合には、「出る」は「単に前項の動作・作用を強調しているに過ぎない」とする。一方、移動の意味が含まれないものについては、前項動詞は、「主体の移動の方法や様相を示している」とする。従来の前項、後項の文法的意味関係の枠に入れるとするならば、前者は補助関係、後者は修飾関係としてまとめられたものであろう。また、「～だす」を含む複合動詞についても別立てで論じられており、現代語で多様な意味変化を見せる「～だす」を含む複合動詞の意味構造が示されている。前述したとおり、「出づ」を含む複合動詞表現が時を経て「出だす」に変わっていくものがあるという流れから考えれば、現代語の「～だす」の複合動詞には過去に「出づ（出る）」で表現されていたものが広く吸収されているということになる。これに従えば、古くは「出づ」で表現されている複合動詞の中に、現代語の「出す」につながってくる意味も存在していると考えられる。

「～だす」の複合動詞について、姫野氏の前掲書では「出す」が後項に位置したときに担う意味特徴によって分類が行われている。まず、「移動・顕在化」を表す語彙的複合動詞と「開始」を表す統語的複合動詞に分ける。前者については対象の空間的移動を伴う「移動」と伴わない「顕在化」に分けた上で、更にその下位分類として「移動」の下に「外部、前面、表面への移動」と「表立った場への出現」を置く。また「顕在化」には、下位分類として「顕現」「創出」「発見」を置く。以上を簡単にまとめると次のようになる。

A　移動・顕在化の「～だす」　語彙的複合動詞

移動　…外部、前面、表面への移動（例　家を飛びだす　山から材木を運びだす）

…表立った場への出現（例　警察に泥棒を突き

だす）

顕在化…顕現（例　足元を照らしだす）

…創出（例　技術者が作品を作りだす）

…発見（例　刑事が犯人を捜しだす）

B　開始の「～だす」　統語的複合動詞　（例　車が動きだす　本を読みだす）

更に「移動」に該当する前項要素が他動詞の場合はその修飾関係に着目し、さらに四つの項目を立てる。次に分類と語例の一部を示す。

（1）方法　「～することによって出す」追いだす　運びだす　漕ぎだす　取りだす

（2）状態　「～した状態で出す」くわえだす　つまみだす　持ちだす　抱えだす

（3）目的　「～することすなわち外界に出す（開放、外部利用等）」救いだす　助けだす　貸しだす　売りだす

（4）分析不可能なもの　乗りだす　さしだす

前項動詞の意味特徴と、後項に位置したときに「出づ」が担う意味の違いに着目し、分類するという手法[9]によって、「～だす」の複合動詞が持つ重層的な意味の広がりが明らにされている。

先に、古典語のところで集中の「漕ぎ出（づ）」は「漕ぎ出す」と訳が当てられていることに言及した。古典語、現代語の差はあるにせよ、日本語母語話者である私たちは「漕ぎ出す」という訳語で表される内容に対し、さしたる疑問も抱くことはなく、感覚としてその内容をすっと理解することがある程度可能である。そのため今見たような意味変化は、語感を共有する者の間では問題としてはあまりあがらないものである。しかし、「外国語としての日本語」という視点からそれらを客観的に考えるとすると、現代語で「漕ぎ出す」といった場合は「ある場所からある場所へ漕いで出る」という単純な移動の意味の他にも「漕ぎ始める」といった動作・行為の開始の意味を表す場合もあり、その様相は複雑である。文脈によってどれにあたるか明白な場合もあれば、いくつかの意味が重なりあっていると思われる場合もあり、意味の振り分けは容易ではないが、このような意味変化の様相は古典語においても現れているのではないかと推測する。古典語では取り立てて問題にされなかった語彙の意味機能に着目するという現代語におけるこの手法は、古典語においても十分に応用が可能であると考える。

本稿は古典語のそれも『万葉集』という限られた資料を基にしてのささやかな分析であるが、このような視点を持ちつつ、分析を試みたいと考える。

三、本稿の目的

本稿の目的は、山口前掲修士論文に引き続き『万葉集』に現れた二語の複合動詞について現代語研究の手法にならい、前項動詞、後項動詞の意味特徴の分析を行うことで、従来の文法的側面からの分析から更に踏み込んで語彙的側面からの分析を行い、その様相の一部を明らかにすることにある。上代における複合動詞については、前項後項の順序が入れ替わっても意味が変わらないという「結合順の自由」が言われているが、この点

についても山口前掲修士論文に引き続き考察を行う。具体的には「出づ」が後項に位置したものと前項に位置したものを集中から抽出し、意味特徴により分類し、比較を行う。なお、用例分析には小学館の『新編日本古典文学全集　万葉集1～4』を用い、本稿中の引用例もこれによった。その他、必要に応じて適宜注釈書[10]を参照した。

四、「出づ」が後項に来る複合動詞群

集中に現れた、後項に「出づ」が来る二語の複合動詞は全部で五七例であった。先行研究のところで見た、姫野氏の現代語の分類のうち後項の「出る」「出す」についての分類を参考にこれらを分類する基準を立てることをまず試みた。しかし、集中の限られた用例が豊富な現代語の用例を基盤にして立てられた氏の分類項目全てに渡って現れることはなく、現代語で提示されたレベルにまで細分化した意味の分類は困難であった。また、現代語にはない古典語独特の表現もあった。よって、現代語研究の分類をゆるやかに応用する形で、細分化の枠を取り払い、もっと大きな枠組みで捉えることとした。氏の「～だす」の分類のBにあった開始表現については、集中には「本を読み出す」に相当するような移動の意味を全く持たない開始のみを表していると考えられる「出づ」の使用例は見あたらなかった[11]ため、項目として立てなかった。また、Aの下位分類である「顕在化」にあたると思われる例も認められなかった。よって、「～でる」の分類と、「～だす」のA「移動・顕在化」の項目の「移動」と、その下位分類を参考とし、新たな分類の基準をたてた。それが次に示すものである。

①独立した移動行為…「出づ」の表す意味はその独立用法が表す[12]「主体が内ととらえられるある場所から外ととらえられるある場所へ空間的に移動する」という意味の移動行為そのものである。前項と後項は、前項で表される動作・行為が行われてから続いて「出づ」という行為がなされる継起的配列で、形は複合の形式をとっているがそれぞれが本動詞の意味を強く残している。その意味で前項後項の独立性が最も高い。文法的意味関係の分類ではいわゆる並列関係とされたもの[13]。

②移動の手段・状態が示された移動行為…「出づ」が空間的移動行為を表す点においては①と同じであるが、前項動詞によって「出づ」の移動行為がどのようになされるかが説明されているという点で①と異なっている。「～することによって出づ」という移動の手段を表すもの、「～した状態で出づ」という移動の状態が説明される。意味の重点は後項にあり、前項が後項を修飾する形となっている。

③強意…「出づ」の持つ空間的移動の意味の独立性が薄れ、抽象化したもの。意味の中心は前項にあり、後項はそれを強調する役割を担う。文法的意味関係の分類では、いわゆる補助関係としてまとめられたもの。後項の「出づ」に「移動」の意味がどの程度認められるかによって、現代語の「出る」の一般的な意味分類[14]を参考にさらに三つの下位分類を設けた。現代語では、このカテゴリーが非常に細分化されているが、ここでは移動、発生、出現の三つの緩やかな枠組みとした。

1から3に行くに従って「出づ」そのものの持つ空間的移動の意味は薄れ、発生や出現といった抽象化したものとなる。

1　移動　前項動詞と補助的な関係にあるが、「出づ」には空間的移動の意味が認められると考えられるもの。

2　発生　「出づ」は移動と言うよりもむしろ発生の意味を持つ。内にあるものの一部が外に現れるという意味で空間的移動の意味の残存も認められるが、その度合いは1に比べ明らかに希薄になっている。

3　出現　2から更に移動の意味が薄れ、出現とも言うべきレベルまで抽象化したもの。物理的な移動は伴わず、対象の状態の変化を表す。

全ての項目において意味の連続性は常に存在しており、絶対的な差別化は難しいが、集中の用例をこの基準に従って分類してみたのが次の表である。なお、「出」も「出づ」と同じ意味を持つものとして、同様に扱った。

「出づ」の意味特徴		前項動詞（用例数）
①独立した移動行為		待つ(2)　潜く(2)
②移動の手段・状態が示された移動行為		・手段―漕ぐ(22)　抜く(1) ・状態―照る(1)　追ふ(1)
③強意	1　移動	生まる(1)　浮く(1)　罷る(4)
	2　発生	咲く(2)　にほふ(1)　萌ゆ(1) ［石木より］生る(1)
	3　出現	［花に・穂に］咲く(4)　［人と］なる(1)

（注1）集中に「うち出づ」が2例あったが、「うち」は一般的に接頭辞と解されるため、分類からは除外した。

（注2）もうひとつ分類から除外したものに「思ひ出（づ）」がある。用例数は十二例と「漕ぐ」について多いが、「思ひ～」となる複合動詞については前項の「思ひ」が動詞であるかということを含めその構成の型についてはっきりしないところがあるため、やむなく今回は分類から除外することにした。用例のみ一覧に掲載した。

それでは、各項目ごとに集中の用例を見つつ、特徴を考えることにする。なお、用例一覧は稿末に付した。（資料①「出づ」が後項に来る複合動詞群　参照。）

まず、前項後項の独立性が最も高い、①の用例から見ていくことにする。これは、前項で表される動作・行為に引き続いて、後項で表される動作・行為が行われるもので、例えば次の歌の「来」「立つ」の関係がそれである。

・金門にし　人の来立てば　夜中にも　身はたな知らず　出でてそあひける（⑨一七三九）

「来立つ」は「人がやってきて立つ」という意味で、「来る→立つ」という動作の継起的配列となっている。

「出づ」を含むものについては、「潜く」「待つ」の二語が該当した。

・天地の遠きがごとく…野島の海人の　海の底　鮑玉　さはに潜き出　舟並めて…貴き見れば（⑥九三三）

・紫の　粉潟の海に　潜く鳥　玉潜き出ば　我が玉にせむ（⑯三八七〇）

ここでの「潜き出」は「潜る→出る」という継起面に沿った表現であると考えられる。ただし、その構造は先に見た「来立

つ」ほど単純ではない。「潜く」は『旺文社古語辞典』（一九八八年　旺文社）によると、「①（貝や海草をとる等の目的で）水中にもぐる。②水中にもぐらせる。」とある。「潜き出」の「出」をそのまま自動詞に解釈すれば「海人が（鮑玉をとりに）潜って、鮑玉が出る」という構造になる。この歌の中での「鮑玉さはに潜き出」の表す内容としては、『新編日本古典文学全集　万葉集』は「（野島の海人が沖の暗礁から）鮑玉を潜って取り出し」とし、『日本古典文学大系』は「潜って取り出して来」としていて、意味の面からすると「海人が（鮑玉を取りに）潜って、鮑玉を出す」という「出」を他動詞的とする構造が考えられているものか。次の「待ち出づ」の例も似たような構造を持つ。

・君来ずは　形見にせむと　我が二人　植ゑし松の木　君を待ち出でむ（⑪二四八四）

・高山に　たかべさ渡り　高々に　我が待つ君を　待ち出でむかも（⑪二八〇四）

表記そのままに従えば「わたしがあなたを待って、あなたが出る」となるが、『新編日本古典文学全集　万葉集』には次のような説明がある。

君を待ち出でむ―待チ出ヅは、待った甲斐があって対象が出現したことを、主語を一本化して表現したもの。この出ヅは他動詞的用法。『古今集』恋歌四にも「有明の月を待ち出でつるかな」（六九一）のような例がある。

また、『万葉集釈注』では「待ち出づ」について「効果を出現させる意」とし、「待っていた効果を見せて相手の姿を眼前に現してくれるだろう」と訳を付けている。『日本古典文学大系』は、巻一一の二八〇四番歌について、「待ち出でむ」を「待っていると現れるだろう」と訳し、「出ヅは他動詞。この語、直訳すれば待ち出すとなる」としている。この「潜く」「待つ」に接続した「出づ」について筆者は現時点では定まった考えを持たない。「出づ」の他動詞用法については、はっきりとしないところがあるが、これらが「出づ」の他動詞的用法であるならばここで「出づ」の他動詞的用法とでも言うべき分類項目を立てるべきかもしれない。しかし、関氏の「本来自動詞であるものが仮に他動詞性を帯びた」[15]とする見方に従い、本稿では他動詞的と解せられる可能性があるものでも、「出づ」とよまれているものについては分類の対象とし、ここに収めた。

ともあれ、前項で表される動作・行為に続き後項の「出づ」の行為がなされるという意味では、動作の継起的配列であることには違いなく、①に分類できるものと考える。以前の「行く」「来」の分析[16]でも見たが、この分類の前項には動詞で表される動作・行為が行われる順に示されるという意味で独立用法を持つあらゆる動詞が可能性として立ちうることになる。多様な動詞の組み合わせを予想していたが、いわゆる連語的とされる並列関係に該当したのは二語のみであり、前項、後項の意味関係も特殊なものであった。

次に、分類の②を見る。ここには「漕ぐ」「照る」「追ふ」「抜く」の四語が該当した。「漕ぐ」は「出づ」と複合した動詞の中で最も数が多く二二例であった。「漕ぐ」「抜く」は移動の手段を、「追ふ」「照る」は移動の状態を説明している。

・庭清み　沖辺漕ぎ出づる　海人舟の　梶取る間なき　恋もするかも（⑪二七四六）

「沖辺漕ぎ出づ」は「沖に漕いで（漕ぐことによって）出る」と考えられ、どのように「出づ」という移動行為がなされるのか、その手段を前項の「漕ぐ」が修飾し、説明している。「抜く」の例は先に見たが「（剣を）抜くことによって出す（出る）」で、同じく移動の手段を表している。

・我妹子や　我を思はば　まそ鏡　照り出づる月の　影に見え来ね（⑪二四六二）

「照り出づ」は、月が出てくる状態を前項の「照る」が示しているのであり、前項は後項で表される移動行為がどのような状態で行われているのか説明していると考えられる。「光を放ちながら（光を放った状態で）出る」月、といった意味である。

・山の端を　追ひ出づる月の　はつはつに　妹をそ見つる　恋しきまでに（⑪二四六一）

「追ひ出づる月」は「山の端を目指して（目指した状態で）出る」月という意味である。これも同様に移動の状態を説明している。

このグループの動詞は、次に見る「生まる」「罷る」などと違いそれ自体に「外部への移動」の意味を持たない。よって、前項はどのように「出づ」という移動行為がなされるかを説明する役割を担っており、その点で同じグループに属する。意味の重点はあくまで後項の「出づ」にあると言える。

③に分類された前項動詞には、それ自体に「外部への移動」の意味が程度の差はあれ含まれている。そのため、「出づ」の持つ移動の意味は前項動詞の持つ意味を更に強調する働きをしていると考えられる。このグループでは意味の中心は前項にある。「1　移動」に該当する例を一つひく。

・世の人の　尊び願ふ　七種の　宝も我は　なにせむに　我が中の　生まれ出でたる　白玉の　我が子古日は　…（⑤九〇四）

「生まる」そのものに「内から外への移動」の意味が含まれているため「出づ」の持つ「移動」の意味はそれに更に重なるものとなる。このグループの前項動詞は、物理的空間的移動の意味を持つ動作動詞である。

次に「2　発生」を見る。これに接合する後項の「出づ」にはもともとの「出づ」が持つ「内から外へ」という意味は存在しており、空間的な移動の意味の残存も認められないわけではないが、「ある場所からある場所へ」空間的に移動するという①、②の移動とは明らかに質が異なる、「変化」に近いものであり、その点で③「1　移動」とも区別されるものである。

・雁がねの　初声聞きて　咲き出たる　やどの秋萩　見に来我が背子（⑩二二七六）

・石走る　垂水の上の　さわらびの　萌え出づる春に　なりにけるかも（⑧一四一八）

前項は自然現象を表す動詞[18]である。

「3　出現」は、物理的空間的移動を伴わない状態変化ともいうべきもので、「出づ」の移動の意味はさらに抽象化している。

・隠りのみ　恋ふれば苦し　なでしこが　花に咲き出よ　朝な

朝な見む（⑩一九九二）

・はだすすき　穂には咲き出ぬ　恋を我がする　玉かぎる　ただ一目のみ　見し人故に（⑩二三一一）

・世の人の　尊び願ふ　七種の　…夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も　うへはなさがり　さきくさの中にを寝むと　愛しく　しが語らへば　いつしかも　人となり出でて　悪しけくも　良けくも見むと　大船の　思ひ頼むに…（⑤九〇四）

先の例は、恋人に「なでしこの花になって現れ出てほしい」と望む歌で実際の移動行為は伴わず、出現の場が「花に」と「に」格で示されている。「穂に咲き出づ」も同じ構造である。続く例も「人として一人前になる」という意味で、移動の抽象化された意味として状態の変化が表わされていると言えよう。

五、「出づ」が前項に来る複合動詞群

続いて、「出づ」が前項に位置する複合動詞群を見る。「出づ」が前項に位置した複合動詞は全部で五八例であった。この場合の「出づ」は全て単独使用の「出づ」とも解せられるものであり、前項と後項の関係は、動作の継起面に沿って並んでいると解せられる独立的色彩の濃いものが多くあった。ここではさしあたり前項と後項の結合関係に着目し、動作の継起面に沿って並べられているものとそれ以外のものに分け、意味関係を見ていくことにする。

前項と後項の結合関係	後項動詞（用例数）
①前項、後項が動作の継起面に沿って並べられているもの。	居る(4)　走る(1)見る(10)濡る(1)立つ(12)　向かふ(1)　来(15)かへる(1)※立つ(13)
②その他（①以外のもの）	

※「旅に出る」意の「道に出で立つ」（6例）を含む。

用例は稿末に付した。（資料②「出づ」が前項に来る複合動詞群　参照。）

①の例を見る。

・春の日の　霞める時に　墨吉の　岸に出で居て…（⑨一七四〇）

・一重山　隔れるものを　月夜良み　門に出で立ち　妹か待つらむ（④七六五）

・秋風の　吹きにし日より　天の川　瀬に出で立ちて　待つと告げこそ（⑩二〇八三）

・すべもなく　苦しくあれば　出で走り　去ななと思へど　此らに障りぬ（⑤八九九）

いずれも、前項の「出づ」という移動行為の後に後項で表される動きがなされている。「出で居る」は「（家から）岸に出て、そこに座っている」という行為を表しており、続く二例も「出で立つ」は、「（家から）門のところ（二〇八三は瀬）に出て、そこに立っている」ことを表している。「出で走る」も同様で、「（家から）出て、走る」といった動作が継起的に配列された表現である。なお「出で立つ」は、「門に」「瀬に」「庭に」など、「出づ」という行為の着点であり後項動詞の表す行為が行われる場となる場所が、「に」格で表されているものが多かった。一方、「どこから」移動が開始されるのかを表す「移動

行為の起点」については歌の中で明示されていないものがほとんどで多くのものが「家から（出る）」を想定していると思われた。また、着点を「に」格で表しているという点で形を同じくするものに「旅に出る」意の「道に出で立つ」という表現が六例あった。語の構成を考えると「家から道に出て、そこに立つ」という行為から連想して「旅に出る」意を表しているのかと考えられ、ここに含めることも考えたが、「出づ」も「立つ」も単独用法として「出発する」意のものが存在している[19]ため、単なる行為の継起的表現とするのにも疑問が残る。「道に出で立つ」が「出かける、出発する」意で使われているその他の「出で立つ」と同じ性質を持つものと考え、ここでは②のグループに分類することにした。

「②その他」に属するものには、次のような例がある。

・倉橋の　山を高みか　夜隠りに　出で来る月の　光乏しき（③二九〇）

「出で来」は、「出て来る」の意で、「出づ」で表される移動行為が話者の視点からすると、「こちらに向かって（近づいて）くる」ことを表しており、「来」は、「来る」という移動行為そのものではなく、前項動詞で表される動きに話者との関係性を付加する働きをしている。現代語で対応関係を表すならば、「出て行く」に対する「出て来る」の関係に同じである。

・ひさかたの　天照る月は　神代にか　出で反らむ　年は経につつ（⑦一〇八〇）

この「かへる」は反復用法を表すと解せられるものである。他には、「そびえ立つ」意の「出で立つ」がある。

・なまよみの　甲斐の国　うち寄する　駿河の国と　こちごちの　国のみ中ゆ　出で立てる　富士の高嶺は　天雲も…（③三一九）

ここに分類された「出で立つ」全一三例のうち、「そびえ立つ」意の例は一例だけで、その他は全て「出発する」「出かける」意の「出で立つ」であった。

・なゆ竹の　とをよる御子　さにつらふ　我が大君は…七ふ菅手に取り持ちて　ひさかたの　天の河原に　出で立ちて　みそぎてましを…（③四二〇）

・今日よりは　顧みなくて　大君の　醜のみ楯と　出で立つ我は（⑳四三七三）

先に注(19)でも触れたが、単独用法で、「出づ」と「立つ」には出発を表すものがある。「出づ」についてもう一度用例を見てみる。

・珠洲の海人の　沖つ御神に　い渡りて…妻の命の　衣手の別れし時よ　ぬばたまの　夜床片去り　朝寝髪　掻きも梳らず出でて来し　月日数みつつ…（⑱四一〇一）

四一〇一番歌は、「都を出てきた」というほどの意味と考えられるが、この「出づ」は、出発に通じる。注(19)の繰り返しになるが、この「出づ」は、現代語で言うならば「入る」に対応する用法ではなく、「帰る、戻る」に対応する用法である。「出づ」の表すところが物理的空間的移動であることにはかわりないが、概念としては「去る」に近く、その場を「離れていく」という色彩を帯びる。ここで示した「出で立つ」の「出づ」もこの用法の流れを引くものと考えたいと思う[20]。

「出づ」が後項に来るものには、動作の継起的配列にあたるものは二例しかなかったが、「出づ」が前項に来るものにおいてはその関係にあたるものが全体の半数を占めているという結果になった。

六、「出づ」を含む複合動詞の様相
―調査のまとめ―

以上「出づ」が後項に来る複合動詞と、前項に来る複合動詞について見た。以上の調査から、集中における「出づ」を含む複合動詞の結合のあり方についてまとめる。

まず、「行く」「来」「渡る」「過ぐ」などに認められた前項後項の入れ替わりの例は、集中の「出づ」を含むものには存在しないことがわかった。山口前掲修士論文の調査では、入れ替わっても意味が変わらない例は、この調査で言う「「出づ」が前項に来る複合動詞群―②その他」の項目に現れていた。「出づ」の場合はまさに入れかわって存在している例はなかったが、その意味関係に着目しても「出づ」が後項に位置した場合に見られた、前項の動詞が「出づ」を修飾して移動の手段・状態を示すといった関係や、「強意」のグループに見た、「出づ」が前項動詞で表される動作・行為の補助をするといった関係と同種のもので入れ替わっている例も、認められなかった。このような意味関係は、「出づ」が後項に位置した時にのみ生じるものであると言える。なお山口前掲修士論文の調査では、前項後項が入れ替わって出現しておりなおかつ意味の差がないと考えられたものはすべて、「行く」「来」を含んだものであり、その機能は先に「出で来」のところで見たものと同様の、自ら方向を持っている移動性の動詞に話者との関係性を付加するというものであった。その流れに従えば、「出で来」に対し「来出づ」、といったような形もあるかとは思われたが、用例としては存在していなかった。[21]

動作の継起順に動詞が連続して並べられているという関係においては、どちらの動作・行為が先に行われるかによって順番が変わるため、その意味で前後の入れ替わりは、実際に集中に現れているかは別として、存在の可能性は十分にあるといえる。しかし、それ以外の関係においては、山口前掲修士論文の結果と合わせてもその意味的結合関係を保持しての入れ替わりは先に示したもの以外はなく、『万葉集』全体でも前後の入れ代わりがどの程度自由に行われていたか疑問の残るところである。なお、『源氏物語』等中古の作品には、「出で立つ」の入れ替わりにあたる「立ち出づ」という用例が一定数存在する。この点について関一雄氏は前掲書において、中古になると、両語には別語と捉えられるような意味の違いが認められるとし、その本義の違いを「出で立つ」は「動作主が現在の行動範囲を飛び出して、心理的に（多くは空間的にも）遠いと感ずる志向点に向かって行動を起こす」とし、「立ち出づ」は自分の行動範囲を出るという点では「出で立つ」と重なるが、こちらの場合は志向点を持たず、「自己の行動範囲を無目的に出る」ことであり、「その場から離れれば十分」であると述べている。[22]

集中に存在する動詞連続表現は、いわゆる「並列関係」や「連語」といったような名称で前項・後項のつながりの弱さば

かりに目が向けられがちであるが、今見てきたように、「出づ」が後項に位置した場合には語彙的意味関係という点で単に「並べて書かれている」以上の関係が存することがわかった。前項・後項の入れかわりも行われていないことからも、既に「出づ」については一定の意味関係を表わすための語順は決まっており、その固定化が進んでいるのではないか。ここに現代語複合動詞につながる初期の様相を認めることができると考える。

七、「移動」から「開始」の意味へ
―「～出づ」の開始用法についての可能性

最後に、現代語複合動詞において強い造語力をもつ、「～出す」の開始表現（「雨が降り出す」「本を読み出す」…「出す」は前項で表される動作・行為の開始を表す。）について、日本語の複合動詞の萌芽を見るという立場から考えてみることにする。

外国語としての日本語教育の場面では、開始のアスペクトを表す二つの複合動詞「～出す」と「～始める」についてその用法上、意味上の違いをどう説明するかが問題となり、そのような観点を持った研究からいくつかの見解が示されている。

この問題をごく簡単に示せば、

・雨が降り始めた　雨が降り出した　・本を読み始めた　本を読み出した

といった文がある場合に、両者の違いを日本語を母語話者としない者に対しどのように説明するか、ということである。ともに、「出す」「始める」は「降る」「読む」といった前項動詞で示される内容の開始の局面を説明しており、その意味で「開始のアスペクトを表す表現」としてひとつにまとめられることが一般的になされている。両者の違いの説明には意味面からのものや形式面からのもの等諸説あるが、ある程度共通のものとして提示されるものに「意志を表す表現での使用の可否」がある。ここでは特にこの点について考察する。

森田良行氏は次のように述べる。

「～出す」は「考え出す、思い出す」のように、〝事柄の発生、形成〟の意のある点、「～始める」と異なる。「～出す」は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。だから、人間行為に使われても意志性がない。「歩き出した、読み出した」などは、「彼はいやいや歩き出した」のように他者の行為を叙す場合か、「あのテレビ番組を見出してから、土曜の夜が楽しみになった。」「やっと実の親を探し出すことができた」のように、自身のことでも結果的に事実を叙す場合で、自己の意志的判断「そろそろ本を読み出そうか」などとは言わない。「ぼつぼつ時間だ。読み始めるとしようか」、「～始める」を用いる。（傍線筆者）

（『基礎日本語辞典』一九九九年角川書店）

姫野昌子氏も『複合動詞の構造と意味用法』「第5章5・4開始の「～だす」」において「～出す」は「意志的表現にそぐわない」とし、次のような例を挙げる。

？早くやり出せ／早くやり始めろ

？今すぐ読み出したい／今すぐ読み始めたい

?今日中に論文を書き出しておこう／今日中に論文を書き始めておこう

日本語教師用の手引書の中にも、開始の「～出す」と「～始める」の違いを「意志の形が可能かどうか」という点で説明しているものがある。

（1）急に雨が〈降り出した／降り始めた〉。

（2）田中さんは6時ごろから料理を〈作り始めた／作り出した〉。

（3）6時ごろから料理を〈作り始めよう／（?）作り出そう〉。

「～出す」も開始を表します。「～始める」とほぼ同じように使えますが、（3）のような意志表現とともにはあまり用いません。（傍線筆者）

（『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』「§6－4　～始める、～だす、～終わる（～終える）、～やむ」庵功雄ほか二〇〇〇年スリーエーネットワーク）

「～出す」が意志表現とともに使われにくいことをどれも指摘しているが、森田氏の言及のほかは、なぜ「～出す」が意志表現にそぐわないのかという点についての説明はなく、また、意志表現を「取りにくい」とするならば、「とる」場合もあることが暗示されているように思われるが、その点についての説明も見当たらなかった。ここで言われている「意志表現」の「意志」がどこまでを指すのかという問題もあるが、この点について筆者は、以前に行った、日本語母語話者によって書かれた小説四十三作品他を対象とする開始表現についての調査[23]の結果から、「歩く」「走る」「動く」「駆ける」「泣く」「笑う」「言う」の語について、「～出そう」「～出したい」等を含む表現の存在を確認した。

古典語においては、「出づ」という形が「出だす」という他動詞の形を派生させていくことは先に見た。集中には現代語に見られる「本を読み出す」のような移動の意味を持たないまったくの開始表現と考えられるような例は存在しなかったわけであるが、実は分類の過程で、開始の用法に通じるのではないかと思われる用例があった。ここでは、「漕ぎ出（づ）」を例にとり、このような例について考えてみることにする。これは先の分類で移動の②に入れたものである。移動の意味の存在を前提として、以降例を見ていくことにする。

『新編古典日本文学全集　万葉集』では、「漕ぎ出（づ）」に全て「漕ぎ出す」の訳語を当てている。[24] しかし、「漕ぎ出す」と一言で言ってもその表す所は、一様ではない。現代語においてこの言葉の表し得る内容を規定するならば、先に見たとおり、「漕いで移動する」意の「漕ぎ出る／漕ぎ出す（この場合の「出る」と「出す」は共に移動を示し、用法上の意味の差[25]はない。）」と、「漕ぐという動作を開始する」意の「漕ぎ出す」に大別できる。集中の次の歌はどのように解せられるだろうか。

・庭清み　沖辺漕ぎ出づる　海人舟の　梶取る間なき　恋もするかな（⑪二七四六）

・みさご居る　渚に居る舟の　漕ぎ出なば　うら恋しけむ　後は相寝とも（⑫三二〇三）

・竹敷の　玉藻なびかし　漕ぎ出なむ　君がみ船を何時とか待たむ（⑮三七〇五）
・大伴の　三津に船乗り　漕ぎ出ては　いづれの島に　廬せむ我（⑮三五九三）
・熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな（①八）

先に分類のところでも見たように、これらの「出づ」にはすべて「移動」の意味が認められる。この点、同種のものと考えることができる。では、この「移動」という意味をさらにもう一段階掘り下げて考えてみる。現代語の分析には、「出る」の意味内容を細かく分類したものがある。ここでは森田良行氏の『基礎日本語辞典』（一九九一年　角川書店）より「でる」の項の「事物の移動・移行」から、「出る」に関する記述のうち集中の例に関係する（1）と（2）を引用し、簡略化して示す。なお、引用文中の「A」は「出る主体」、「B」は「出る起点」、「C」は「出て行く先」を表す。例文については、一部省略した。

（1）「AガBカラCニ（ヘ）出る」
「早く教室から出なさい」「庭へ出て涼む」
事物がある領域（B）から、領域外（C）へと移行すること。内側から外側への移行で、「から」格には内側の場所または移動の出口が立つ。
「部屋、家、東京、日本……から出る」（起点）
「門、玄関、窓、出口、非常口…から出る」（経由点）
「穴から出る」などは、内側とも出口とも解せる例である。（1）の「出る」は「はいる」と対応する。（傍線筆者）

（2）「AガBヲ出る」
「下宿を出る」「大学を出て社会人になる」「日本を出てアメリカに渡る」「を」格に起点の語（B）を入れ、目標や到達点（C）を示す要がある場には「…を出て」のあとに「BをCへ出て行く」のように他の動詞を用いて表す。
「下宿を出て寮に移る」「故郷を出て異国の空の下で暮らす」
その場所を離れて、そこから外へ移り動く。〝去る、出発する、卒業する、おん出る〟など、状況によって種種の意味を帯びる。（2）の「出る」は「帰る／戻る」などと対応する。（傍線筆者）

（1）の「庭へ出て涼む」のような「入る」に対応する移動の意味と、（2）の「去る、出発する」といった離れる意識を持った「帰る、戻る」に対応するような移動の意味は、集中の例には認められないだろうか。この視点を持って先ほどの五首の例をもう一度見る。

始めの歌は「沖辺」と「出て行く先」が明示されている。「漕ぎ出」は、（1）に近い表現と見ることができそうである。続く二例は「漕ぎ出」た船を見送る視点に立った人の歌で、どこを去るのかという起点については歌中では明示されていないが「私のところ」であり、「その場所を離れて、そこから外へ移り動く」という意味の（2）に近い用法と言えそうであ

る。そして最後の二例も同く（2）のグループに入ると考えられる。四例ともに「離れる」意味を持つのであるが、前者二例のほうが、森田氏の言葉を借りれば「去る」という意味に、後者二例のほうがより「出発する」という意味に近いように思われる。出発という意味では、巻一の八番歌と類似した「さあ、漕ぎ出そう」といった内容のものが他にもある。

・海神は　奇しきものか…いざ子ども　あへて漕ぎ出む　には
も静けし（③三八八）

・天の川　波は立つとも　我が舟は　いざ漕ぎ出でむ　夜のふけぬ間に（⑩二〇五九）

『動詞の意味用法の記述的研究』（一九七二年　秀英出版）の「6　でる」の項で、現代語の「出る」の出発の用法に言及しているところがある。以下記述を引用する。

［011］出発すること

・そのうちに汽車がするする出ていった。（あらくれ）

・東京の交通公社本社前から出る志賀高原ゆきの夜行バスは、（旅　一九九五年一月）

・1時半ごろ汽船の出る所へ行った。（暗夜行路・前）

これらにあたっては、やはり出発点は一つの点であるが、「江戸を出る」などとちがって（「江戸を出る」は、［「010］ある地点から離れること」に分類されている。［011］はその変種である。　筆者注）、さらに、特定の地点をはなれるということも問題でなくなり、ただ単に移動をはじめたことをあらわしている。上に見るように、車か船かの例だけだが、そのほか、たとえば、「使いの者が朝九時に出たから…」のようなばあいも、これに属するとみてよいだろう。

別語で置き換えるならば、これらは「発車する」とも表せる語である。「どこから離れるか」という出発の地点が意識の上で問題でなくなった時、出発の意味は更に移動行為の開始を表すことになるという。今見た集中の「出発」の意味を持つのではないかと述べた「漕ぎ出（づ）」についても、「出発」がさらに発展した「移動行為の開始」という意味をも認める余地はないだろうか。

実際、現代語の複合動詞の中にも「出発」という移動行為が「開始」表現に非常に近いであろうと思われる例が存在している。現代語において、「漕ぎ出す」「歩き出す」「動き出す」「走り出す」といった複合動詞は「新しい世界への出発」の意味をもって使われることがある。[26]「新しい世界への出発」は、「内と捉えられる場所から外と捉えられる場所への移動」という「出す」の意味の「外へ」の部分が個々具体的な特定の場所ではなく「内とは異なる世界」と認識された場合の、抽象化した例と位置付けられよう。例えば次のような例がある。

・できなかったことを数えるよりも…歯ぎしりするほどの思い出もあるけどいつまでも囚われていないで歩き出そう…

（『産経新聞』【朝の詩】「私に」二〇〇六年東京朝刊一面）

この「歩き出す」という表現は、「歩き始める」と置き換えが可能という点において、一般に「開始」を表す表現とされる。「出す」の表す意味は「始める」であり、前項動詞の表す動作・行為の開始を表す後項要素であるという理解である。確か

に、そのようにも考えられるが、「雨が降り出す」「本を読み出す」といったものとは少し質を異にした、先に見た「出発」から導かれる「移動行為の開始」という要素があるように思われてならない。

以上のことを踏まえて、集中の例に再び戻る。先ほど見た「出づ」の出発の意味を持つと考えられるもののほかにも、例えば次の歌などには「出発」から導かれる「移動行為の開始」の意味を認める可能性がありはしないだろうか。

・海人娘子　棚なし小船　漕ぎ出らし　旅の宿りに　梶の音聞こゆ（⑥九三〇）

・磯に立ち　沖辺を見れば　海布刈り舟　海人漕ぎ出らし　鴨翔る見ゆ（⑦一二二七）

・彦星し　妻迎へ舟　漕ぎ出らし　天の川原に　霧の立てるは（⑧一五二七）

三つめの歌を例に取る。これは「彦星が舟を漕ぎ出す」という構造で、どこから出るのかという起点（出発点）と、どこへ向かって出るのかという着点（目的地）についての意識が先に見た巻一一の二七四六番歌や巻一五の三七〇五番歌に比べ希薄であるように思われる。[27]「移動」という意味の中に「漕ぐことの開始」の要素が窺われはしないだろうか。

筆者はここでこれらの表現が「漕いで（海に）出る」という移動の表現なのか、「漕いで出る＝去る」という離反の意識を持った出発に近い移動の表現なのか、「漕ぐことを始める」という開始の表現なのか、どれに当たるのかを峻別しようとするのではない。すべて移動という枠の中にあるこれらは、むしろ重層的に全ての意味を併せ持っていて、連続的であると考えるほうが自然である。その意味の強弱はおそらくその表現を受け取る人の語感によっても左右されるものであろう。筆者は、この「漕ぎ出」にいわゆる開始の「漕ぎ出す」につながるその萌芽としての意味が認められないかという「可能性を見る」という視点からの整理を行ってみた。

これらの例を、仮に現代語の「雨が降り出す」ほどにはっきりと開始の意味を示さないまでも「「〜出づ」形の複合動詞（時代が下るに従い「〜出だす」形をも派生させていく）の開始用法のはじめの形である」と捉えるとすると、集中のこれらの例は、この項の最初で触れた現代語研究の「開始の「〜出す」は意志表現をとりにくい」とする見解にひとつの示唆を与えるように思われる。

・熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな（①八）

・海神は　奇しきものか…いざ子ども　あへて漕ぎ出む　にはも静けし（③三八八）

・天の川　波は立つとも　我が舟は　いざ漕ぎ出でむ　夜のふけぬ間に（⑩二〇五九）

先ほど示したこの三つの歌は、強調して示したように三つ全て勧誘の意味を持った意志の形を取っている。現代語研究のいう「とりにくいとする意志の表現」というものの「意志」の定義がどこまでを指すのかあいまいで、管見に入った限りではその前提ともいうべきものについて記したものを見つけることができなかった[28]が、関連する議論がここに現れたような「勧誘」の

表現をも含んでなされている状況[29]から判断すると、おそらくここで取り上げた例も広く「意志の表現」として含まれているだろう。

古典語の、それもかなり早い時期において開始表現に通じると考えられる「出づ」を含む複合動詞が、意志の表現として現れていたということはここでひとつ言えそうなことである。そして、おそらく現代語の「雨が降り出す」という、移動の意味を全く含まない純粋な開始の用法とともに、同じ性質のものとして現在くくられているものの中にも、この流れを汲むものが存在しているはずである。先に行った小説の用例分析の調査で意志の表現が確認できた「動き出す」や「歩き出す」といったものが今はまず思いつくが、この流れを汲むものに「意志の言い方が使えない[30]」と言い切れるものがどれだけ存在するであろうか。

以上、集中の用例から現代語の開始表現につながる意味を考えた。しかし、開始表現の全体像について考えるには、もっと時代の下ったものの例も見なければ確かなことは言えない。「～始める」との違いも考えるならば、集中にもその例があるが、古語においてその用法に通じる「そむ」、「始む（はじむ）」についても観察する必要がある。ここでは、開始用法に通じる「出づ」の存在の可能性を指摘するにとどめ、今後他資料の分析を少しずつ行いながらこの点を考察していきたいと考える。

本稿では、集中の「出づ」を含む複合動詞を概観した。「出づ」「出だす」の単独用法、そして集中に一例存在した「出だす」を含む複合動詞の例のほか、考察の途中で生まれた疑問も含め課題として残したことは多い。筆者は日本語教授の際の語彙・文法上の諸問題を「日本語が使われてきた姿」を見るという通時的な視点から考察したいという希望を持っている。まだその段階には至らないが、これらの点も含め、今後さらに多くの用例を見て考えていきたいと思っている。

注

（1）文法的意味関係について関一雄氏は次のようにまとめている。（『国語複合動詞の研究』一九七七年笠間書院）

補助関係…後項が前項を形式的に補助する関係にあるもので、常に被補助要素が補助要素に先行する。（帰り行く・散り乱る）

修飾関係…前項が後項を修飾する関係にあるもの。（隠し持つ・かへり見る）

一致関係…前項と後項の意味が単にプラスされたのではなく、二語の元の意味が融合しあって新たに別の意味が生じていると考えられるもの。（あひ思ふ・出で立つ）

（2）『日本文法大辞典』（一九七一年村松明編　明治書院）の「複合語」の項には、「単語を構成上から共時的に見た場合、独立した語が二つ以上結合して、新たに一語としての意味、機能を持つに至ったもの。」（傍線筆者）とある。

（3）「結合順の自由」は関一雄氏が前掲書第一章第三節上代の複合動詞において用いた言葉である。例えば次のようなものである。

・石そそき　岸の浦廻に　寄する波　辺に来寄らばか　言の繁けむ

⑦一三八八

・大野らに　小雨降りし　く木の下に　よりより寄り来　我が思ふ人

⑪二四五七

（4）山口真紀（但し名義は旧姓中村）「『万葉集』におけるいわゆる複合動詞について」（平成一二年度慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻修士論文）。対象とする複合動詞は、並列関係も広く含む。

「動詞＋動詞」という助詞の介在等が見られない、形の上での複合を基準とした。集中には三語の複合も存在するが対象は二語のものに限定した。本稿もさしあたり前稿に引き続き二語の複合を対象とする。

（5）関氏の前掲書にあげられている例を示す。

袖君「…」ちて、おましなど出すとて、圓座にかきつク。

旅トイへばわれも悲しな世をウしと知らぬ山路に入りぬと思へば

おなじ山路にとかいふなる

ナド、イヒ出して、暫ばかりありて、（宇津保物語、菊の宴）

あさましう、人のとかくいふを、よからぬ者どものいひ出づる事と、聞きにくくおぼして、宣ひ消つを、（源氏物語　葵）

（6）これとは、また別の次元の話になるが、現代語において「～出す」「～出る」両方の形が存在し、意味も同じであると考えられる複合動詞もある。

『複合動詞の構造と意味用法』「第五章5・2「～でる」の複合動詞」（一九九九年ひつじ書房）において、姫野昌子氏は、同一文脈において現代語複合動詞で「出す」と「出る」の入れ替えが行われても意味が変わらないものとそうでないものをわけ、表にして示している。

（表は姫野氏の著作からの引用である。横軸に前項動詞の意味を三つにわけて示し、更に縦軸に「出る」と「出す」の言い換えの可否を示している。今は、こちらに注目する。）

前項要素＼後項要素	（a）同一の文脈で「～でる」が「～だす」に言い換えられるもの	（b）言い換えられぬもの
（1）「外部への移動」の意を含むもの	沸き出る（＝沸き出す）　溢れでる　浮き出る　浮かびでる　にじみでる　ほとばしりでる　こぼれでる　漏れでる　萌えでる	生まれでる　咲きでる　現れでる
（2）「外部への移動」の意を含まぬもの（移動の方法・様相を示すもの）	這い出る（＝這いだす）　転がりでる　飛びでる　滑りでる　走りでる　漕ぎでる　にじりでる　流れでる　しみでる　溶けでる　ふきでる　突きでる　迷いでる　さ迷いでる　漂いでる　逃げでる　逃れでる　抜けでる　忍びでる　浮かれでる	輝きでる　進みでる　捧げでる　歩みでる　泳ぎでる　躍りでる　暴れでる　舞いでる　ひょろけでる　よろばいでる　ゆらぎでる　ゆるぎでる　抜きんでる
（3）接頭語等	はみでる（＝はみだす）	おんでる　さしでる

（a）の言い換え可能なグループについては、「数が多く、よく使われる」とし、言い換え不可能なグループは「古めかしい語が多い」と述べている。

（7）『時代別国語辞典　上代編』では「言に出でて…」の例を、自動詞の例としても載せている。これについて「（「出づ」が自動詞であるか他動詞であるかは　筆者注）はっきり分けられない場合もあるが、コト＝イヅの約音コチヅにおいて、「あが下延へを許知弖つるかも」（⑭三三七一）のように、一般に他動詞につく助動詞ツをとった例もあることからみて、他動詞としての用法もあったことは確かである。」としている。

（8）注（6）参照。

（9）現代語研究では、対象は複合動詞ではないが単独使用の「出る」「出す」について同様の着眼点から分析を行ったものに『動詞の意味用法の記述的研究』（国立国語研究所報告43　一九七二年　秀英出版）第2部6「でる」、『基礎日本語辞典』（森田良行　一九九一年　角川書店）がある。それぞれ分類の項目立てに差異はあるが物理的移動という基本義を出発点にその意味の変化を詳述している。

(10) 参照した注釈書は次の通り
『日本古典文学大系　万葉集一～四』高木市之助　五味智英　大野晋一九五七年　岩波書店
『万葉集全注』伊藤博・稲岡耕二他諸氏　一九八三年　有斐閣
『万葉集釈注』伊藤博　一九九五年　集英社
『万葉集注釋』沢瀉久孝　一九五七年　中央公論社
『万葉集全註釈』武田祐吉　一九四七年　角川書店

(11) なお、集中には「出だす」を伴った複合動詞が一例存在するが、これも開始表現ではない。
・まそ鏡　かけて偲へど　献り出す　形見の物を　人に示すな　(⑮三七六五)

また、百留康晴氏によれば「―出す」の形の開始を表わす複合動詞表現は中世以降に出現するとされている。(「複合動詞後項「～出す」における意味の歴史的変遷」二〇〇二年『文化』東北大学)

(12) 「出づ」の独立用法の基本義が「主体が内ととらえられるある場所から外ととらえられる場所へ空間的に移動する」ことであるとし、物理的空間的な、主に人間についての移動行為をその代表としてあげることは、現代語研究では一般的に行われていることである。『動詞の意味用法の記述的研究』には「「でる」のもっとも基本的な意味は、物体が他の物体から、または一定の範囲の空間から、外に移動することである。このうちで、用例の大部分をしめるのは、人間が建物やへやの外に移動するものである。」とある。現代語研究では出発点をまずそこに定めているため、「涙が出る」や「風が出る」「(気持ちが)態度に出る」といった表現は必然的に物理的移動の抽象化した表現として位置づけられる。本稿でも現代語研究を指針として分類基準をたてることを試みているが、また一歩踏み込んだ次元の問題として、「歌集に出づ」「色に出づ」「言に出づ」といった表現もあるように通時的に見た本動詞「出づ」の基本義と言うべきものが「物理的な移動」であるかについては疑問の残るところである。

(13) 山口前掲修士論文の「行く」「来」の分類においては、森田良行氏の現代語の「行く」「来る」の分類(『動詞の意味論的文法研究』第3章「移動動詞「行く」「来る」の意味」一九九四年　明治書院)に習う形で、この並列関係にあたる項目名を「順次性」とした。

(14) 注(9)参照。現代語研究で一般的に参照される二書を参考にした。

(15) 「一、先行研究」参照。関氏は他動詞性を帯びた「出づ」について「前項の他動詞にひかれて」と述べていた。「潜く」の場合は自動詞であるので「潜き出づ」についてはさらに疑問が残る。

(16) 山口前掲修士論文「第二章第二節―二「行く」と「来」」

(17) 『日本古典文学大系　万葉集』ではこの歌は、「追出月」の「追」を「遣」の誤として「さし出づる月」とよんでいる。

(18) なお、『新編日本古典文学全集　万葉集』のよみに従い分類からは除外したが、『古典文学大系』のよみによれば、巻一一、一二七八番歌の「生ふ」などもここに該当する。
・水底に　生ふる玉藻の　生ひも出でず(大系　生ひ出でづ)よしこのころは　かくて通はむ

(19) 集中の例を挙げる。
・都辺に　立つに近付く　飽くまでに　相見て行かな　恋ふる日多けむ(⑰三九九九)
・珠洲の海人の　沖つ御神に　い渡りて…妻の命の　衣手の　別れし時よ　ぬばたまの　夜床片去り　朝寝髪　掻きも梳らず　出でて来し　月日数みつつ…(⑱四一〇一)
・大君の　命恐み　出で来れば　我取り付きて　言ひし児なはも(⑳四三五八)

四一〇一の歌は、「都を出てきた」というほどの意味と考えられるが、この「出づ」も、出発に通じる。この「出づ」は、現代語で言うならば「入る」に対応する用法ではなく、「帰る、戻る」に対応する用法である。表すところが物理的空間的移動であることにはかわりないが、概念としては「去る」に近く、その場を「離れていく」という色彩を帯びる。「来」と複合した四三五八番歌も同様である。

(20) 移動の「出づ」が持つ意味については「七、「移動」から「開始」の意味へ―「～出づ」の動作・行為の開始を表す用法」において詳述する。

(21) 例を示す。

・石そそき　岸の浦廻に　寄する波　辺に来寄らばか　言の繁けむ　(⑦一三八八)

・大野らに　小雨降りしく　木の下に　よりより寄り来　我が思ふ人　(⑪二四五七)

・沖つ島　い行き渡りて　潜くちふ　鮑玉もが　包みて　遣らむ　(⑱四一〇三)

・朝されば　妹が手に巻く…韓国に渡り行かむと…　(⑮三六二七)

(22) なお、集中には「立ち出む」の訛りとされる次の例がある。

・津の国の　海の渚に　船装ひ　立し出も時に　母が目もがも　(⑳四三八三)

これについて、関氏は「この「たしづ」は「出発する」意であるが、結合順からしても、意味の面からしても異例であり、中央語の歴史を見る立場からは、切り離して取り扱ってよかろう」と述べている。筆者もこれに従う。

(23) 山口真紀『開始の「～出す」「～始める」について―小説作品の用例分析を中心に―』「3・1・3意志の表現で使われる「～出す」「～始める」」(二〇〇六年度慶応義塾日本語・日本文化教育センター日本語教育学講座修了論文)。一八九八年以降に発表された小説を対象とした。

(24) 注釈書によっては「漕ぎ出(づ)」を「漕ぎ出す」としたり「漕ぎ出る」としたりしている。その現れ方は様々で特に意図を持って使い分けがなされているという印象は受けなかった。

(25) 姫野昌子氏『複合動詞の構造と意味用法』「第5章5・2「～でる」の複合動詞」に言及がある。注(6)参照。

(26) 『産経新聞』の記事より引用した現代語の用例を次に示す。

命をかけた世界を目の前にすると、日常の悩みや不安が、とてもちっぽけなものに思えました。夢と希望をくれた航空ショーに感謝し、明るい未来に向かって走り出そうと、決意を新たにしました。

(二〇〇二年一一月一三日　東京朝刊　オピニオン面)

(27) 現代語訳は「彦星が妻迎え舟を漕ぎ出したらしい　天の川原に霧が立ったのを見ると」とあてられている。

(28) 先述した森田氏の研究では、「自己の意思的判断」には「～出す」は使えず、「～始める」を使うとし、「意志表現」の表す内容を限定している。しかし、「さあ、漕ぎ出そう」と言った場合には一般に「勧誘」という名称でまとめられるものの「自己の意思的判断」の要素も含まれていると思われる。

(29) 「複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ―『～出す』の起動の意味を中心にして―」今井忍　一九九三年『言語研究』2　京都大学

「開始の局面を取り立てる局面動詞について―『～始める』『～出す』の用法比較―」

山崎恵　一九九五年　『阪田雪子先生古希記念論文集日本語と日本語教育』三省堂

(30) 文中に引用した『産経新聞』からの抜粋も「歩き出そう」という意志の形をとっている。

参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘
『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』　二〇〇六年　スリーエーネットワーク

伊藤博　『万葉集釈注』　一九九五年　集英社

伊藤博・稲岡耕二他諸氏　『万葉集全注』　一九八三年　有斐閣

今井忍　「複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ―『～出す』の起動の意味を中心にして―」　一九九三年　『言語研究』2　京都大学

沖森卓也　「古典語の複合動詞」一九九〇年『別冊国文学38古典文法必携』　学燈社

沢瀉久孝　『万葉集注釋』　一九五七年　中央公論社

小嶋憲之　木下正俊　東野治之『新編日本古典文学全集　万葉集1～4』　一九九六年　小学館
上代語辞典編集委員会編『時代別国語辞典　上代編』　一九七二年　三省堂
関一雄　『国語複合動詞の研究』　一九七七年　笠間書院
国立国語研究所報告43『動詞の意味用法の記述的研究』　一九七二年　秀英出版
高木市之助・五味智英・大野晋『古典文学大系　万葉集一―四』　一九五七年　岩波書店
武田祐吉　『万葉集全註釈』　一九四七年　角川書店
中村幸弘　「万葉集中の「思ひ―」型複合動詞について」一九六九年『国語研究』28　國學院大學
中村幸弘　『補助用言に関する研究』　一九九五年　右文書院
東辻保和　「平安時代複合動詞後項索引稿上・下」　一九七八、九年『高知大学学術研究報告人文科学』27・28　高知大学
姫野昌子　『複合動詞の構造と意味用法』　一九九九年　ひつじ書房
百留康晴　「複合動詞後項「～出す」における意味の歴史的変遷」二〇〇二年『文化』66　東北大学
「複合動詞と動詞連接―「～出づ」を中心に―」二〇〇三年『国語と国文学』80　東京大学
松村明　『日本文法大辞典』　一九七一年　明治書院
森田良行　『基礎日本語辞典』　一九九一年　角川書店
山崎恵　「開始の局面を取り立てる局面動詞について―『～始める』「～出す」の用法比較―」　一九九五年『阪田雪子先生古希記念論文集日本語と日本語教育』三省堂

なお、国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース『万葉集』」（『日本古典文学大系　万葉集』のテキストデータ）を使用し、用例比較のための用例を抽出した。

資料①「出づ」が後項に来る複合動詞群

①独立した移動行為（並列関係）

潜く

・天地の遠きがごとく…鮑玉　さはに潜き出…貴き見れば（⑥九三三）

・紫の　粉潟の海に　潜く鳥　玉潜き出ば　我が玉にせむ（⑯三八七〇）

待つ

・君来ずは　形見にせむと　我が二人　植ゑし松の木　君を待ち出でむ（⑪二四八四）

・高山に　たかべさ渡り　高々に　我が待つ君を　待ち出でむかも（⑪二八〇四）

②移動の手段・状態が示された移動行為（修飾関係）

移動の手段

漕ぐ

・熟田津に　船乗りせむと　月待てば　潮もかなひぬ　今は漕ぎ出でな（①八）

・海神は　奇しきものか…いざ子ども　あへて漕ぎ出む　にはも静けし（③三八八）

・海人娘子　棚なし小船　漕ぎ出らし　旅の宿りに　梶の音聞こゆ（⑥九三〇）

・朝なぎに　ま梶漕ぎ出でて　見つつ来し　三津の松原　波越しに見ゆ（⑦一一八五）

・磯に立ち　沖辺を見れば　海布刈り舟　海人漕ぎ出らし　鴨翔る見ゆ（⑦一二二七）

・大船を　荒海に漕ぎ出で　や船たけ　我が見し児らが　まみは著しも（⑦一二六六）

・大船に　ま梶しじ貫き　漕ぎ出なば　沖は深けむ　潮は干ぬとも（⑦一三八六）

・彦星し　妻迎へ舟　漕ぎ出らし　天の川原に　霧の立てるは（⑧一五二七）

・朝開き　漕ぎ出て我は　湯羅の崎　釣する海人を　見て帰り来む（⑨一六七〇）

・天の川　波は立つとも　我が舟は　いざ漕ぎ出でむ　夜のふけぬ間に（⑩二〇五九）

・庭清み　沖辺漕ぎ出づる　海人舟の　梶取る間なき　恋もするかも（⑪二七四六）

・難波潟　漕ぎ出づる船の　はろはろに　別れ来ぬれど　忘れかねつも（⑫三一七一）

・みさご居る　渚に居る舟の　漕ぎ出なば　うら恋しけむ　後は相寝とも（⑫三二〇三）

・玉の緒の　現し心や　八十梶掛け　漕ぎ出む船に　後れて居らむ（⑫三二一一）

・大伴の　三津に船乗り　漕ぎ出ては　いづれの島に　廬りせむ我（⑫三五九三）

・朝開き　漕ぎ出て来れば　武庫の浦の　潮干の潟に　鶴が声すも（⑫三五九五）

・大船に　ま梶しじ貫き　海原を　漕ぎ出て渡る　月人をとこ（⑮三六一一）

・竹敷の　玉藻なびかし　漕ぎ出なむ　君がみ船を　何時とか待たむ（⑮三七〇五）

・奈呉の海人の　釣する舟は　今こそば　舟棚打ちて　あへて漕ぎ出め（⑰三九五六）

・防人の　堀江漕ぎ出る　伊豆手船　梶取る間なく　恋は繁けむ（⑳四三三六）

・難波津を　漕ぎ出て見れば　神さぶる　生駒高嶺に　雲そたなびく（⑳四三八〇）

・大君の　任けのまにまに…朝開き　我は漕ぎ出ぬと　家に告げこそ（⑳四四〇八）

抜く

・大君の　命恐み　見れど飽かぬ…我が過ぎ行けば　いや遠に　里離り来ぬ　いや高に　山も越え来ぬ　剣大刀　鞘ゆ抜き出でて　伊香山　いか

にか我がせむ　行くへ知らずて（⑬三二四〇）

移動の状態

照る

・我妹子や　我を思はば　まそ鏡　照り出づる月の　影に見え来ね（⑪二四六二）

追ふ

・山の端を　追ひ出づる月の　はつはつに　妹をそ見つる　恋しきまでに（⑪二四六一）

③強意1　移動

浮く

・梯立の　熊来のやらに　新羅斧　落とし入れわし　あげてあげて　な泣かしそね　浮き出づるやと　見む　わし（⑯三八七八）

生まる

・世の人の　尊び願ふ　七種の　宝も我は　なにせむに　我が中の　生まれ出でたる　白玉の　我が子古日は　明星の　明くる朝は　しきたへの　床の辺去らず　立てれども　居れども　共に戯れ　夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も　うへはなさがり　さきくさの　中に　を寝むと　愛しく　しが語らへば　いつしかも　ひとなり出でて　悪しけくも　良けくも見むと…我が子飛ばしつ　世の中の道（⑤九〇四）

罷る

・天降りつく　天の香具山　霞立つ…ももしきの　大宮人の　罷り出て　遊ぶ船には　梶棹も　なくてさぶしも　漕ぐ人なしに（③二五七）

・天降りつく　神の香具山　うちなびく　春さり来れば　桜花　木の暗繁に…ももしきの　大宮人の　罷り出て　漕ぎける船は　棹梶も　なくてさぶしも　漕がむと思へど（③二六〇）

・ももしきの　大宮人の　罷り出て　遊ぶ今夜の　月のさやけさ（⑦一〇七六）

・凡ろかに　我し思はば　かくばかり　堅き御門を　罷り出めやも（⑪二五六八）

③強意2　発生

咲く

・雁がねの　初声聞きて　咲き出たる　やどの秋萩　見に来我が背子（⑩二二七六）

・美夜自呂の　すかへに立てる　かほが花　な咲き出でそね　こめてしのはむ（⑭三五七五）

にほふ

・紅の　深染めの衣を　下に着ば　人の見らくに　にほひ出でむかも（⑪二八二八）

萌ゆ

・石走る　垂水の上の　さわらびの　萌え出づる春に　なりにけるかも（⑧一四一八）

生る（なる）

・父母を　見れば尊し…石木より　生り出し人か…然にはあらじか（⑤八〇〇）

③強意3　出現

咲く

・隠りのみ　恋ふれば苦し　なでしこが　花に咲き出よ　朝な朝な見む（⑩一九九二）

・言に出でて　言はばゆゆしみ　朝顔の　ほには咲き出ぬ　恋もするかも（⑩二二七五）

・我妹子に　逢坂山の　はだすすき　穂には咲き出でず　恋ひ渡るかも（⑩二二八三）

・はだすすき　穂には咲き出ぬ　恋を我がする　玉かぎる　ただ一目のみ見し人故に（⑩二三一一）

なる

・世の人の　尊び願ふ　七種の　宝も我は　なにせむに　和が中の　生まれ出でたる　白玉の　我が子古日は　明星の　明くる朝は　しきたへの　床の辺去らず　立てれども　居れども　共に戯れ　夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も　うへはなさがり　さきくさの　中に

を寝むと　愛しく　しが語らへば　いつしかも　ひとなり出でて　悪しけくも　良けくも見むと…我が子飛ばしつ　世の中の道（⑤九〇四）

＊「思ひ出づ」は今回分類対象からは除外した。用例のみここにまとめて示す。

思ふ

・佐保山に　たなびく霞　見るごとに　妹を思ひ出で　泣かぬ日はなし（③四七三）

・思い出づる　時はすべなみ　豊国の　木綿山雪の　消ぬべく思ほゆ（⑩二三四一）

・かきつはた　につらふ君を　ゆくりなく　思ひ出でつつ　嘆きつるかも（⑪二五二一）

・思ひ出でて　音には泣くとも　いちしろく　人の知るべく　嘆かすなゆめ（⑪二六〇四）

・さ夜更けて　妹を思ひ出で　しきたへの　枕もそよに　嘆きつるかも（⑫二八八五）

・思ひ出でて　すべなき時は　天雲の　奥かも知らず　恋ひつつぞ居る（⑫三〇三〇）

・思ひ出づる　時はすべなみ　佐保山に　立つ雨霧の　消ぬべく思ほゆ（⑫三〇三六）

・旅にして　妹を思ひ出て　いちしろく　人の知るべく　嘆きせむかも（⑫三一三三）

・裏もなく　我が行く道に　青楊の　萌りて立てれば　物思ひ出つも（⑭三四四三）

・をみなへし　咲きたる野辺を　行き巡り　君を思ひ出　たもとほり来ぬ（⑰三九四四）

・大君の　任けのまにまに…日に異に増せば　悲しけく　ここに思ひ出いらなけくそこに思ひ出　嘆くそら…恋ひつつぞ居る（⑰三九六九）

・大君の　命恐み…鶴がねの　悲しく鳴けば　はろばろに　家を思ひ出…嘆きつるかも（⑳四三九八）

資料②「出づ」が前項に来る複合動詞群

①前項、後項が動作の継起面に沿って並べられているもの

居る

・春の日の　霞める時に　墨吉の　岸に出で居て　釣船の…（⑨一七四〇）

・時つ風　吹飯の浜に　出で居つつ　贖ふ命は　妹がためこそ（⑫三二〇一）

・せむずべの　たづきを知らに…根延へる門を　朝には　出で居て嘆き夕には…（⑬三二七四）

・白雲の　たなびく国の…根延へる門に　朝には　出で居て嘆き　夕には…（⑬三三二九）

立つ

・月夜には　門に出で立ち　夕占問ひ　足占をそせし　行かまくを欲り（④七三六）

・一重山　隔れるものを　月夜良み　門に出で立ち　妹か待つらむ（④七六五）

・なつきにし　奈良の都の　荒れ行けば　出で立つごとに　嘆きし増さる（⑥一〇四九）

・この月の　ここに来れば　今とかも　妹が出で立ち　待ちつつあるらむ（⑦一〇七八）

・ねもころに　物を思へば…朝には庭に出で立ち　夕には…（⑧一六二九）

・秋風の　吹きにし日より　天の川　瀬に出で立ちて　待つと告げこそ（⑩二〇八四）

・月夜良み　門に出で立ち　足占して　行く時さへや　妹に逢はざらむ（⑫三〇〇六）

・射水川　い行き巡れる　秋の葉の…にほへる時に　出で立ちて　振り放け見れば…（⑫三九八五）

・春の苑　紅にほふ　桃の花　下照る道に　出で立つ娘子（⑲四一三九）

・谷近く　家は居れども…朝には　門に出で立ち　夕には…（⑲四二〇九）

・古に　ありけるわざの…家離り　海辺に出で立ち　朝夕に…（⑲四二一一）

・高円の　秋野の上の　朝霧に　妻呼ぶ雄鹿　出で立つらむか（⑳四三一九）

濡る

・湯種蒔く　あらきの小田を　求めむと　足結出で濡れぬ　この川の瀬に（⑦一一一〇）

走る

・すべもなく　苦しくあれば　出で走り　去ななと思へど　此らに障りぬ（⑤八九九）

向かふ

・大君の　遠き朝廷を…東男は出で向かひ　顧みせずて　勇みたる…（⑳四三三一）

見る

・天飛ぶや　軽の道は…我妹子が　止まず出で見し　軽の市に…（②二〇七）

・紀伊の国の　雑賀の浦に　出で見れば　海人の灯火　波の間ゆ見ゆ（⑦一一九四）

・いかといかと　ある我がやどに…花咲きにけり　朝に日に　出で見るごとに息の緒に…（⑧一五〇七）

・雨隠り　心いぶせみ　出で見れば　春日の山は　色付きにけり（⑧一五六八）

・手寸十名相　植ゑしく著く　出で見れば　やどの初萩　咲きにけるかも（⑩二一一三）

・夜を寒み　朝戸を開き　出で見れば　庭もはだらに　み雪降りたり（⑩二三一八）

・我が背子を　今か今かと　出で見れば　沫雪降れり　庭もほどろに（⑩二三二三）

・春日なる　三笠の山に　居る雲を　出で見るごとに　君をしそ思ふ（⑫三二〇九）

・朝な朝な　筑紫の方を　出で見つつ　音のみそ我が泣く　いたもすべなみ（⑫三二一八）

・見欲しきは　雲居に見ゆる…童ども　いざわ出で見む　こと放けば…（⑬三三四六）

・天地と　共にもがもと…夕霧に　衣手濡れて　幸くしも　あるらむごとく　出で見つつ　待つらむものを…（⑮三六九一）

・大君の　遠の朝廷と…咲く花を　出で見るごとに　なでしこが…（⑱四一一三）

②その他

かへる

・ひさかたの　天照る月は　神代にか　出で反るらむ　年は経につつ（⑦一〇八〇）

来

・倉橋の　山を高みか　夜隠りに　出で来る月の　光乏しき（③二九〇）

・雨隠る　三笠の山を　高みかも　月の出で来ぬ　夜はふけにつつ（⑥九八〇）

・猟高の　高円山を　高みかも　出で来る月の　遅く照るらむ（⑥九八一）

・妹があたり　我は袖振らむ　木の間より　出で来る月に　雲なたなびき（⑦一〇八五）

・倉橋の　山を高みか　夜隠りに　出で来る月の　片待ち難き（⑨一七六三）

・さ夜ふけば　出で来む月を　高山の　峰の白雪　隠してむかも（⑩二三三二）

・奥山の　真木の板戸を　押し開き　しるや出で来ね　後は何せむ（⑪二五一九）

・高山ゆ　出で来る水の　岩に触れ　砕けてそ思ふ　妹に逢はぬ夜は（⑪二七一六）

・かくだにも　妹を待ちなむ　さ夜更けて　出で来し月の　傾くまでに（⑫二八二〇）

・逢ふよしの　出で来るまでは　畳み薦　隔て編む数　夢にし見えむ（⑭二九九五）

・汝が母に　こられ我は行く　青雲の　出で来我妹子　相見て行かむ（⑯三五一九）

・隠りのみ　恋ふれば苦し　山の端ゆ　出で来る月の　顕さばいかに（⑯三八〇三）
・大君の　命恐み　出で来れば　我取り付きて　言ひし児なはも（⑳四三五八）

立つ

・なまよみの　甲斐の国　うち寄する　駿河の国と　こちごちの　国のみ中ゆ　出で立てる　富士の高嶺は　天雲も…（③三一九）
・なゆ竹の　とをよる御子…ひさかたの　天の河原に　出で立ちて…（③四二〇）
・玉桙の　道に出で立ち　別れ来し　日より思ふに　忘る時なし（⑫三一三九）
・紀伊の国の　浜に寄るといふ　鮑玉…玉桙の　道に出で立ち　夕占を…（⑬三三一八）
・玉桙の　道に出で立ち　あしひきの　野行き山行き…（⑬三三三九）
・出で立たむ　力をなみと　隠り居て　君に恋ふるに　心どもなし（⑰三九七二）
・玉桙の　道に出で立ち　別れなば　見ぬ日さまねみ　恋しけむかも（⑰三九九五）
・かき数ふ　二上山に…清き河内に　出で立ちて　我が立ち見れば…（⑰四〇〇六）
・大君の　任きのまにまに…玉桙の　道に出で立ち　岩根踏み…（⑱四一一六）
・玉桙の　道に出で立ち　行く我は　君が事跡を　負ひてし行かむ（⑲四二五一）
・今日よりは　顧みなくて　大君の　醜のみ楯と　出で立つ我は（⑳四三七三）
・大君の　命恐み…群鳥の　出で立ちかてに　滞り…（⑳四三九八）
・大君の　任けのまにまに…玉桙の　道に出で立ち　岡の岬…（⑳四四〇八）